

## 入院生活の果てに

平成二十四年七月、ここ数年患っていた「変形性股関節症」の手術をうけた。磨り減っている軟骨をケアし、人工関節と置き換えて痛みのない動きを可能にするという今はありふれた手術である。スニーカーをはいて蟹股で歩いていた私は、手術の後はハイヒールをはいて颯爽と、というかすかな期待もあって決断した。手術は成功したが結果は「障害者」というレッテルを張られるような有様になった。

関節に異常を感じ始めたのはかなり以前、十年近くなるだろうか。最初は膝の違和感で近所の整形外科を尋ねた。病名は「変形性膝関節症」。シップや注射などの対症療法で何とか痛みをおさえ、趣味のダンスに明け暮れていた。そのとき医者は「いずれ股関節もやられるかもしれないから注意するように」とアドバイスしてくれた。不安はあったがそれよりも踊りたい気持ちのほうが強くて放置していた。決定的な痛みを感じてダンスから遠ざかったのは三、四年まえである。

趣味で長年踊っているダンス仲間やはり関節を痛めている人が多くて、あちこち

の整骨院やら整体師を紹介してくれたりしたが、「この病気の治療法は手術以外にありません」という整形外科の医者という言葉を信じていたので、もし、進行するようであればやはり手術するべきかとあれこれ思い悩んではいた。しかし動作の初めなどに痛みがあり、思うように歩き出せないなどの不都合はあっても毎日の生活、買い物や掃除などにそれほど影響はなく、もう「年も年」だから、自分の身体を「だましながら」やっていけばいいかなと傍観したり、しっかりと治療をしてダンスに復帰とまでは言わないが少しは颯爽と歩きたいと思ったり、気持ちちは揺れていた。

アメリカ在住の長女が、孫の夏休みを利用して六月末から八月半ばまで一カ月半ほど来日するという知らせがとどいたのは六月初めのことである。家の留守も病院への付き添いも長女に頼むことが出来るこの機会に手術をするべきだと、東京に住む二女が強く勧めてくれた。動作を変えるたびに「イタタタ」と顔をしかめるのを見て、一人暮らしの母親がある日突然歩けなくなったら大変だという心配が絶えずあったようである。行きつけの整形外科の医者にも日ごろ手術を勧められていたのでそれではと手術ができる病院を紹介してもらおうことにした。

紹介された先の病院は「伊勢原協同病院」。足を運んだことのない病院であったが、口コミで同病院の整形外科は評判がいいということを知り早速出かけて、娘の滞在する期間内に手術をお願いしたいと申し出た。担当医のN先生はしきりにカレンダーをめくって予定表を調べていたが、こちらのちょうど都合のいい日に手術をすることを承諾してくれて、娘が日本に到着した五日後に入院することができた。

繰り返しになるが、「痛みを耐えかねて」「どうしてもダンスに復帰したいから」「最晩年を格好のいい靴で生き生きと過ごしたいから」などというつよい願望があったわけではない。しかし娘二人は、今後とも元気で暮らすためにと強く勧めてくれ、「それでは」といつもの癖で確個たる意志もなく決断した。娘たちがそれほど勧めるのであれば、といういつもの他人任せの気持ちで手術にのぞんだのであった。

しかしそれは考えが甘かったのかもしれない。手術室の異様な雰囲気、青い手術着に大きなマスク、目だけしか顔がみえない数人のお医者さまや看護師さん、天井にはめ込まれた大きなライト、手術台にのつたときはまさに「まな板の鯉」の心境であった。手術事態は麻酔のおかげで知らない間に終わっていたが、さめてからの身の置き場のない重苦しさ、「苦しみ」というものはこんなことを言うのだろうかと思感した。二

日間ほど朦朧としてあまり記憶がない。「痛みはないか」とか、「しびれはないか」とか、しきりに看護師さんたちが語りかけてくれていたが返事もうつろであった。三日目、やっと我に返った。ひりひりするような傷の痛みはなかったが、やはり手術は二度と繰り返したくないという思いであった。

「一人は万人のために、万人は一人のために」という理念を掲げている協同病院はお医者様も看護師さんも行き届いた応対をして、とても親切だったと思う。完全看護のこの病院では、朝と夜、担当の看護師が替わるたびに挨拶に来る。患者一人一人に病状を確かめて話しかける。「ごめんね、お注射をしなくてはいけないの、チクツとするかもしれないからがまんしてくださいね」注射を終えた後は「どうもありがとう」と挨拶をする。病人の気持ちを思いやって看護師長がそのように教育をしているのだろう。看護師は本人の固い意志がないと出来ない過酷な職業で、夜中でもナースコールがあれば患者のところにとんで行く。重病の人はもちろん、患者のわがままであっても静かに聞いてくれて納得のいくような応対をする。彼女たちはまさに「白衣の天使」であった。「私は血を見るのが大嫌いだからとても看護師さんにはなれないわ、偉いのね」と問いかけると「私も普段は血が嫌いです。でも一旦、看護師の制服を着る

と、そんな気持ちは吹っ飛んで、何でもなくなるのです」。美人で若い看護師さんがそういつてにつこり笑った。プロ意識というべきか。

病室は六人部屋で私のベッドは真ん中。伊勢原協同病院はいささか老朽化しており、二年後の平成二十六年九月に七階建ての新病舎が別の場所に完成する予定で、目下建設中だという。今頃六人部屋があるのかと、お見舞いにくれてくれた人は驚くが、まさにひしめき合って一つの病室に六人が「入院生活」という協同生活を共にすることになった。「二つの釜の飯を食う」という言葉があるが、同じ痛みを経験しあっていると、いう仲間意識、プライベートのないせまい空間での生活は私たち六人を一つの絆で結んでいたとおもう。

つかの間の行きずりの付き合いは、かえって親しい人や隣近所の人にはいえない悩みをストレートに話すことができる。日ごとに回復していく喜びもやはり同じである。外科的な傷の回復は早く、リハビリという訓練もあったが、夜など、夕食から消灯の前の時間まで、6人で実によくおしゃべりをした。

何しろ皆、閑をもてあましているのだ。ベッドに横になること、食べること、リハビリ以外することがない。誰にでも話しかけ、自分をさらけ出し、長年の知己のよう

に親しみを持てるようになった。

そのなかに、長年、介護ヘルパーの仕事をしてきた人がいて、人工股関節を埋め込むことは障害者として認定され、公的なケアを受けることが出来るから是非市役所にいつて手続きをするようにと熱心にアドバイスをしてくれた。入院中に証明書を病院に書いてもらえば早く事務が進むからということでも早速、時々見舞いに来てくれる長女に頼んだ。「要支援」の認定も進められ、市役所から早速ケアの担当の人が病院まで出向いてくれて、いろいろと質問された。想像さえしなかった展開で、ダンスに復帰するどころか、退院後は重大な病人としての人生が待ち構えている予感で愕然とした。杖をついて歩行練習をしている自分、まさか、手放せなくなったりはしないだろうという不安。

とりあえずは手術をするまではまともに歩いていた自分が、術後三日目に点滴やら様々な管を身体につけたまま車椅子で、初めてリハビリ室にいった時の屈辱、立ち上がっただけでめまいがしてふらついた。「三日まえまで私は元気だったのに、たった三日で私はどうしてこんなに惨めなことになったのでしょうか」とリハビリの先生に訴えた。「何を言っているのです。その間にあなたは傷んだ股関節を人工のものといれかえ

るといふ大手術をしたのですよ。」先生は呆れたように言ったが、私としては、はなはだ心外であった。

しかし私のリハビリは、日ごろから筋肉もしっかりついていたので驚異的に順調に進み、戸外も散歩できるようになって、病院の周りを先生と一緒に歩き回った。まことに優しい先生のもと（總体的にリハビリの先生は皆、大変に優しい）、日ごとに以前の自分に戻っていくのを確認して安心した。ここでは大勢のお年寄りが懸命にリハビリにはげんでいる。病人になると歩くこと、自分の身の回りのことをすることがいかに大変で大事か、高齢者社会のいま、遠からず私の身にもおとずれるかもしれない未来の姿を見るようで暗嘆としたが、幾度も入院生活を余儀なくされながらも努力を重ねている人たちの姿に改めて感動し、優しい気持ちになった。短期間ではあったが、健康なころには考えてもみなかった別の社会を経験したのであった。

二十五日間の入院生活。もう大丈夫という許可をいただいて、共に生活した同室の仲間たちに別れがたい思いを抱きながら「伊勢原協同病院」を後にした。

手術をしてよかったと思えるようになったのは、だいぶ経って、日常の生活で痛み

がなくなつたことを自覚してからである。しかし、高齢者なつての長期の入院生活は、何事もあなたまかせになり、怠惰に流され、心身共に病人らしくなつてしまいがちであることも実感した。強い自立心をもつて病氣を克服しないと依頼心に流されてしまう危険がある。「ハイヒールをはいてさつそうと歩く」ことは夢に終わった。

夫を亡くしたとき、私は「社会的弱者」となつた。一七年後のいま、障碍者手帳をもらい、「身体的弱者」というレッテルが重なつて、これからまもなく訪れる八十代の人生を送ることになりそうである。

(二〇一二年 八月)